

北の熱帯魚

十一月上旬の海辺はひんやりと肌寒く、練り餌を丸める手はかじかんでいる。鼻をつつく磯のにおいは、それでも生命の息吹を伝えていた。今日はチヌを狙う。釣りをしない人にとってはクロダイのほうなじみ深い名前かもしれない。秋、チヌは水温の低下にしたがって表層付近に移動してくる。このため、この時期はよく釣れる季節として知られている。尤も、こんな平日は釣り人も少ないのだが。撒き餌を放り、こっそり持ち出した竿で適当に仕掛けを投げる。

釣り糸を垂らしながら、呆けたように海を眺める。ゆらり、ゆらりと寄せては返すさざ波をぼんやりと見ていると、まるで自分も波間にいるかのように感じるときがある。自他の境界線がぼやけ、地球と一体になる感覚。自分を包む大いなる意思。俺はこの瞬間が好きだ。世界はちゃんと俺のことを分かってくれている。受け入れてくれている。自分に言い聞かせるように念じると、ふっと柔らかな風が頭を撫でた。それに呼応するようにむらのある赤い髪がそよいだ。

すぐ手前、僅かな浅瀬に鮮やかな橙色の魚影が映った。クマノミだ。本来はこの海域に生息するものではない。もっと南方の、暖かい海のサンゴ礁に生息している。時々、熱帯に生息する魚が海流に流されて全く生育に適さない環境にたどり着いてしまうことがある。このような魚のことを死滅回遊魚という。クマノミの仲間とはある映画で取り扱われて人気を博した。しかし、この海ではどうだろう。生息場所のサンゴ礁もない。共生するイソギンチャクもない。そして仲間もない。ひとりぼっちだ。死滅回遊魚はほとんどの場合子孫を残すことなく、冬場の低温に耐えきれずに死んでしまう。誰一人としてこいつを理解するものはいない。大いなる意思だけがよりどころだ。一人極彩色を纏って泳ぐ姿を想像すると、一等愛おしく思えた。

練り餌を何度かつけなおし、撒き餌もしているが、碌に変化がない。俺は釣りが下手だ。より正確に言えば、先達も明確な成功体験もないので何が正しいかがよくわかっていないのだ。釣果にこだわるというよりは、むしろ海を眺めるついでに釣りをやっているだけなのかもしれない。

そう思いながら辺りを見やると、一人の女子学生が目に入った。紺色のセーラー服を纏い、金色の長髪をなびかせている。よく見ると、頭頂部には地毛の色をのぞかせていた。普段なら人間など気にも留めないとところだが、何だか今日は無性に気になった。磯の魚を掬うときのように、ゆっくりと、しかし自然な歩みで近寄る。

「なんでこんな下平日にこんなところにいるんだ。学校じゃないのか？」

「……それ、あなたが言えることですか？ ……別に、あなたには関係のない話です」

指摘されて自分も制服を着ていることを思い出す。思いのほか丁寧な言葉を返されて面食らったが、相手は呆れたように笑っていた。

「あ、ああ……それを言われるとアレだが……」

「アレって何ですか。というかあなたは誰ですか？」

「すまん、俺は野呂尚人だ。一緒に釣りをしないか？」

自分でも驚くような言葉が口をついて出てしまった。言いながら、口を手で覆いそうになった。最後に誰かと何かをしたい、などと思ったのはいつだっただろうか。

「なんで私が釣りなんか……」

「いいからいいから。この視界からは、世界と繋がれる」

「……はあ、そうですか」

彼女は大きく吐息すると、俺のほうに半歩歩み寄ってきた。

「……で、どうすればいいんですか？」

「よし、じゃあ最初に餌をつけるか。針の先端にこの練り餌をつけるんだ」

「どうやって」

「あー、魚に針の存在がバレないように針全体を覆うんだけど――」

人とのコミュニケーションはやはり難しい。思考が過不足なく伝わるわけではない。実演を交えながら、少しずつ積み重ねて説明していく。なんでこんなことをしているんだろう。

「これでいいですか？」

「ああ、完璧だ」

俺の説明が下手であるにも関わらず、彼女は初心者とは思えないほどの良い手つきでこなしていく。端的に言えば、とても器用だ。糸を通す指からはさみを持つ手、そして上腕に至るまで実に嫺やかで滑らかな所作を見せる。何かそういう類いの訓練でも受けているかのような洗練された動き。最適化されたものには、それが何であれ美が宿る。

「よし、できた。あとはこれを投げるだけだ」

「投げる？ 投げ飛ばせばいいんですか？」

「ああちょっと、ダメダメ！ 竿を投げるな！」

二人で用意した仕掛けが不器用に放物線をなぞる。飛距離は短く、手前の浅瀬に落ちてしまう。運動面はそれほど得意ではないのだろうか。

「うん、悪くない」

「それ、間接的に良くもないって言っていないですか？」

「いや、まあ別に……そんなこともないけど」

「……別にいいです。事実ですから」

何度か餌を付け替えているが、まだアタリはない。それでも、仕掛けの飛距離は少しずつ上がっていった。

「全然釣れませんね」

彼女は口を尖らせた。

「まあ、初めはこんなもんだ。俺だってそんなに釣れるわけじゃない」

「こんなことやって何が楽しいんですか？」

彼女は怪訝そうに聞いてきた。確かに、何が楽しいかと言われると判然としない。今日の釣果が物語っている。

「……なんというか、ぼんやりと海を眺めていると安心するんだ」

「ぼんやりと眺めると……ですか」

そう呟き、彼女は再び竿を振る。

「……そうですね。その気持ちはよく分かります」

その言葉を意外とは思わなかった。しばらくの間彼女を見守っていると、竿が不自然に揺れるのを感じた。

「どう？ 釣りは楽しい？」

「いや……別に……」

彼女はそつけなく述べる。そして一呼吸置き、

「でも……あなたが言っていた意味、少しだけ分かる気がします。私は学校をさぼってここへ来た。特別な意味もなく、ただ海を眺めていた。ただ居場所を求めていた。私たちは繋が

っている。母なる海に抱かれて」

と続けざまに答えた。

「名前……まだでしたね。私の名前は伊緒。牛田伊緒よ」

ああ、そうだ。やはり俺の直感は正しかった。彼女、伊織は同じだったんだ。俺と同じ、死滅・回遊魚だったんだ。

二人は互いに受け入れ合った。どんな背景があらうと、同種の人間であることは確かだった。

「迷子の海で、私はあなたに居場所を教えてもらった。それがどんな意味か、今度はあなたに教えてあげる」

俺は初めて彼女の笑みを見た。ぞくぞくするような含みのある笑みだった。風が髪をくすぐる。寒さなど微塵も感じられない。その代わり、熱帯のようなじつとりとした感触が肌を離れなかった。